

紀尾井だより

5/6 May / June 2021 [Vol.147]

インタビュー

花柳寿太郎・花柳源九郎

クァルテットの饗宴2021

ベルチャ弦楽四重奏団

連載

邦楽名曲解体新書 私のおすすめの一曲

長唄『三曲糸の調』

クラシック音楽のテーマに基づく3つの話

ストラヴィンスキーをめぐる3話

紀尾井町音楽散歩

暎国と日本との架け橋となった夫妻

ハインリヒと光子



紀尾井ホール



児玉竜一



花柳源九郎



花柳寿太一郎

花柳寿太一郎・花柳源九郎

はなやぎ じゅたいちろう

はなやぎ げんくろう

聞き手／児玉竜一 撮影／ヒダキトモコ



——日本舞踊は敷居が高い、そもそも歌詞の意味がよくわからない……。紀尾井ホールがお届けする新しいシリーズ「邦楽探検 詞章の謎」は、そんな悩める「壁」を取り払い、邦楽をもっと楽しんでいただくという試みです。

初回は清元「三社祭」出演される立方の花柳寿太一郎さん(以下、寿)、花柳源九郎さん(以下、源)に、本シリーズで詞章を解説する児玉竜一さん(以下、児)が迫ります。

児 今回の公演で取り上げる「三社祭」ですが、素踊りというのはいまあまりないことだと思えますが、踊る側にとってはどのような曲ですか。

寿 楽しいですね。若い時は体が動くので、先生には動きすぎだと揶揄されることもありましたが、この歳になると今度は動きたくても動けない。パワー任せだった若い時の踊りからいろいろなものをそぎ落としていく作業です。でもまさかこの歳で三社祭を踊ることになるとは。

去年若い人に教える機会があって、自分もやってみせるのですがそれだけでヘトヘト。ものすごく体力が必要なんです。

一度素踊りで踊ったことがありますが、ヒダを開かないように仕立てた袴で踊った記憶があります。扇子もあつらえ、色紋付きもどうしようかと、源九郎さんと話しているところですよ。

児 たくさん身体を動かす曲という意味では「うかれ坊主」もそうですね。

寿 うかれ坊主なんてやらせてももらえなかった。先生からはこんな難しいものなんて、と(笑)。源ちゃんはやったんだよね？

源 藤間勘助先生に習つてうかれ坊主を踊らせていただきました。「二人三番叟」と同じように踊り狂うというか。この両方を踊らせていただいて、今回三社祭を踊るにあたって資料を見ていたのですが、三社祭は難しいなと。二人三番叟は純粋に踊りを見せる作品ですが、三社祭は作品自体が不可思議(な物語)ですし、暴れ狂うものではないという難しさと、歌詞に描かれている江戸の雰囲気はどういう風に出すか、非常に難しいなと思つています。

寿 昔こんな歌詞を理解しようと思つた？

源 ないです！

寿 踊るとき、確かに歌詞の意味を勉強しますけれど、踊っているときは気にしてられない！

児 意味に囚われすぎると曲はどんどん進んでいってしまいますもんね。

寿 ただ、振り付けでこうも言われたことがあって。亡くなられた先の坂東三津五郎さんが仰ったのは、花柳流だと、生



貝、生鯛、生鯛……は手のひらを広げて出すだけだけれど、それを怒って「生貝を持つ手はこうだろう、生鯛を持つ手はこうじゃないか。ちゃんと持つんだよ」って。「持つ」という言葉の意味をちゃんと理解して踊らないといけないことですね。児玉先生の立場ではどうですか。

児 日本舞踊を習っているかたは歌詞の意味はともかく、歌は身体を運んでくれるリズムやテンポを作ってくれるものとして自然に入っていると思うのですが、これから先日本舞踊を観に来るお客さま、習っていないけど観に行きたいというお客さまには、恐らく最初につまずくのが歌詞なんだと思うんですね。

寿 学校の教師をしている兄が観に来たときに「お経を聞いているみたいだ」なんて言っていました。ある時国立劇場で舞台の脇に字幕が出ていて、毎回ああいうふうに字幕を出したらいいのにと。

児 そうですね。ただ、字幕を見すぎると今度は舞台の踊りが見えなくなってしまう。歌舞伎座でも座席の背面にモニター



が設置されて、ボタンを押すと歌詞やセリフの意味が表示されますが、情報量が多すぎて、読んでいるうちに舞台上はほとんど進行している。詞章は「なるほど、大体そういうことを言っているのね、わかった」とお腹に持って、踊りに集中できなかった」とお腹に持って、踊りに集中できなかったら本当は一番いい。それをどうやって作っているのか、ということでのこのシリーズを始めることになりました。

寿 日本舞踊ってどうでしょう、観て五感で楽しむものではないでしょうか。台詞物がありあるわけではないですね、三社祭のように身体を動かすような作品は観ていて楽しいと思うのですが、歌詞の理解はどこまで必要なんでしょうか。

児 確かに、まず観る人を惹きつけることは大事ですね。ただ幸か不幸か日本語なので、歌詞を理解しようと思えばできるわけです。なので「詞章がわからない」という壁を下げたいと思うのです。通常の公演ではプログラム解説もあります、もう少し詳しくご説明して、実際の踊りを観て、歌詞を聞いて「あ、聞こえる



じゃない」とスツと歌詞が耳に入ったらいなと思っています。

源 先ほどの生貝、生鯛……のような振りの細かい意味も、歌詞を知って観るともっと興味をそそられますよね。踊りを習っているかたは振りの意味を知っていますが、初めてパッと観るかたも何を表現しているのか知っているとちょっと楽しんで観てもらえるのではないのでしょうか。

児 お客さまが舞踊をご覧になるときに、詞章をどう考えるか、改めて考えるきっかけになつてもらえたらいいですね。

先輩がたの三社祭で記憶に残っている舞台はありますか？

寿 花柳基さんと花柳輔太朗さんです。観たのは25歳くらいの時で、私自身、一番身体が動けたときですよ、シヨッキングでした。なんだこれというくらい上手で、そのときの衝撃は現在でも残っています。

源 10年前くらいの「稚魚の会」での澤村國矢さんと市川段一郎さんです。すごく衝撃を受けて、役者さんでこんなに踊れてしかも力の抜き加減なども素晴らしくて感動してしまいました。

三社祭 本名題「弥生花浅草祭」。二人の兄弟が漁をしている舟で流行り歌に乗せて軽快に踊っていると、上空に黒雲がかかり「善玉」と「悪玉」が取り付いた。踊りはだんだんと激しくなり、やがて善玉・悪玉は消えて漁師に戻った二人は舞い納める。

邦楽探検 詞章の謎 File.1

清元「三社祭」

お話(児玉竜一)
舞踊「三社祭」
立方 花柳寿太郎、花柳源九郎
清元 清元梅寿太夫、清元紫葉 ほか
囃子 藤舎呂英連中

5/8
14:00

※公演開催についての最新情報は紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。

ベルチャ

弦楽四重奏団



© 武藤章

2019年2月1日紀尾井ホールにおけるベルチャ弦楽四重奏団のコンサートでは、これまで聴いた室内楽公演の中でも最大級のインパクトを受けた。何しろアンサンブルの精度が抜群で、表情も実に豊かな。モーツアルトの弦楽四重奏曲第22番はしなやかで美しく、バルトークの第6番はシャープで奥深く、メンデルスゾーンの第6番は精緻で哀切極まりない。さらに、芳醇なベートーヴェンの第13番の「カヴァ

ティーナ」、凄絶なシヨスタコーヴィチの第3番第3楽章と続いたアンコールが圧巻！彼らは、各曲の特性や魅力を最大限に引き出し、聴く者に圧倒的な感銘を与えた。

ベルチャ弦楽四重奏団は、1994年、ルーマニアのコリーナ・ベルチャ(ヴァイオリン)、ポーランドのクシシュトフ・ホジェルスキー(ヴァイオリン)、ほか2名の創設者とともに英国王立音楽大学で結成された。当初から高い評価を獲得し、2011年にフランスのアクセル・シャハー(ヴァイオリン)とアントワーン・ス・レデルラン(チェロ)が加わってさらに飛躍。現在はベルリンのピエール・ブーレーズ・ザール、ウィーン・コンツェルトハウスのレジデント・グループでもある。CDも多数リリース。ブラームスの弦楽四重奏曲全集がディアパゾン・ドール賞に輝いたのははじめ、受賞歴は数多い。

完璧なアンサンブル、個々の技量の高さ、4人の絶妙なバランス、力みのないダイナミズム、変幻自在の表現、密度の濃い音楽など、彼らの凄さを挙げればキリがない。迫力十分で切れ味も鋭いが、力技やエッジ過多に陥らずに柔らかみやふくよかさがあり、音楽がニュアンス豊かで常に息づいている。第1ヴァイオリンが突出することなく、全員が主役・脇役の両面で機能し、ヴァイオラやチェロも急所では強く主張する。その結果、前記のごとく楽曲の特性に即した最上の表現を聴かせてくれる。しかも渋いと思える作品にも精彩をも

たらずので、何を聴いても引き込まれてしまう。

6月の公演のプログラムも、彼らならではの創意に溢れている。最初はモーツアルトが最晩年に残した第23番「プロシヤ王第3番」。前回の第22番に比べると情熱的で、ロマンの香り漂う曲ゆえに、また違った感触を染しめる。特に無窮動*風の終楽章は耳目を離せない。おつきは簡潔で内省的なシヨスタコーヴィチの第14番。同曲は単独での演奏が稀なので、新たな魅力発見の喜びが待つ。また活躍顕著なチェロも要注目。そしてハ短調の劇的な力作「ブラームスの第1番。重層感と繊細さが共に求められるこの曲は、当グループに最適と思えるし、CDでの緻密かつ雄弁な演奏からも期待が大きい。今回はどれも音の綾が重きをなす内面性の高い作品。『渋い作品に精彩をもたらず』彼らの演奏でこそ聴いてみたい曲ばかりだ。

ベルチャ弦楽四重奏団は、現代最高のカルテットの1つであり、いま聴くべきアンサンブルの筆頭格である。その生演奏に再び触れる機会が楽しみでならない。

*無窮動：常に一定した音符の流れが特徴的な、通常は急速なテンポによる楽曲ないし楽章。

文／柴田克彦(音楽評論家)



© Marco Borggreve

クアルテットの饗宴2021

ベルチャ弦楽四重奏団

モーツアルト
弦楽四重奏曲第23番へ長調
「プロシヤ王第3番」K.590

シヨスタコーヴィチ
弦楽四重奏曲第14番嬰へ長調 op.142

ブラームス
弦楽四重奏曲第1番ハ短調 op. 51-1

※公演中止

6/22
19:00

私のおすすめの一曲

長唄

『三曲糸の調』

お話／今藤 長龍郎さん

箏、胡弓、三味線
それぞれの音を表現

おすすめの曲として、長唄「三曲糸の調」を挙げさせていただきます。

ストーリーは歌舞伎の『壇浦兜軍記』の一場面「阿古屋琴責」で有名ですね。源氏方に追われる平家の武将・悪七兵衛景清とその恋人の遊女・阿古屋を描いた作品です。景清の居場所を知らぬと話す阿古屋に対し、畠山重忠が「心に偽りがあれば演奏の音色が乱れるはずだ」として、阿古屋に箏・三味線・胡弓を弾かせる場面です。でも、こういったストーリーを知らなくても十分に楽しめる曲だと思います。クラシックやジャズは、歌詞がなかったり言葉がわからなかったりしても、「あ、なんかこの曲いいな」と思うことがありますよね。それがきっかけでクラシックやジャズ



ズに興味を持つかたもいるでしょう。この「三曲糸の調」も、そのように聴いていただけの曲だと思います。

歌舞伎の場合は箏、三味線、胡弓の順に、実際にその楽器を弾きますが、長唄の場合は箏、胡弓、三味線の順に、三味線だけで箏や胡弓の音色までも表します。長唄は三味線音楽なので、やはり本領発揮となる楽器を最後に持って来たのでしょう。弾き手にとっては難曲中の難曲と言われていますが、お客さまは一度に三つの曲を聴けるので、大変楽しめる曲だと思います。

私が初めて聴いたのは中学生の時。今藤流の先代家元・三代目今藤長十郎先生の演奏でした。聴き始めたらもう終わっていたという感じで、圧倒されましたね。その後、東京藝大に進み、師匠の今藤綾子先生に「三曲糸の調」をお稽古していた

だきたいと頼んだら、「まだ早い」と。ようやく大学四年生の時、「三曲やる？」時間かかるわよ」と先生から仰っていたきました。導入部は、「阿古屋が弾きたくないのに弾かされている場面だ、という点を念頭に置きなさい」と言われました。喜び勇んで弾く曲ではない、と。そうかと言って、弾き手が「弾かされている」感を出してはいけないし、表現のバランスが難しいですね。また、普通の曲は唄が入る部分にはあまり替手*は入らないのですが、この曲は唄にも替手が入っているの、唄い手も大変なんです。唄い手が聴きたい三味線のメロディは、隣の人ではなくてその一つ隣の人が弾いているわけですから。

三味線技術の百貨店
胡弓の音色に特徴

実は「三曲糸の調」は各流派、さまざまな形があります。今藤流の場合、どちらかと言えばそれぞれの楽器のイメージに寄せています。胡弓の部分がもともと特徴的だと思います。次の音を出すまでのあいだに、少し間が空く。テンポからちよつとずれた、胡弓のゆらゆらした雰囲気を感じていただけたらと思います。この部分が一番力が入るところですが、肩に力が入っていると絶対に弾けない。矛盾したことを言うようですが(笑)。

稽古を始めたころは、いつまで経っても

弾ける気がしなくて、とにかく難しい曲でした。野球にたとえると、「勧進帳」がストリート勝負なら、「三曲糸の調」はカーブやフォークも投げます。いろいろな弾き方があり、三味線技術の百貨店みたいな曲です。初めて聴く人は「何だかよくわからないけどすごい」と思える曲でしょうし、演奏家や耳の肥えた方は「ここはどう弾くんだろう」と興味深いですよね。イスに深く腰掛けてじっくりと聴くというよりは、身を乗り出して聴き入ってしまうような曲だと思います。

*三味線音楽で、基本旋律である本手*に対し、それと合奏するように作られた別の旋律

取材・文・イラスト／尾花知美
(月刊『江戸楽』編集部)

今藤 長龍郎(長唄三味線)

昭和四十四年東京都生まれ。同五十四年今藤綾子(人間国宝)に入門。同六十年今藤長龍郎の名を許される。平成三年東京藝術大学邦楽科を卒業。同十六年アテネオリンピックシンクロナイズドスイミング「ジャパニズドル」三味線パート演奏。同十七年ビクター伝統文化振興財団賞奨励賞受賞。令和元年国立劇場歌舞伎公演「蝙蝠の安さん」(松本幸四郎)作曲。長唄五韻会同人、現代邦楽作曲家連盟会員、創邦21同人。国立音楽大学非常勤講師



ストラヴィンスキーを めぐる

3話

作風を変えながら、次々と旋風を巻き起こしたストラヴィンスキーのお話です。

1 《春の祭典》の革新性

ストラヴィンスキーといえば《春の祭典》。パリのシャンゼリゼ劇場で1913年に行われた初演が巻き起こした大騒動はあまりにも名高い。邪教の儀式をつかさどる大地のエネルギーを描き出す、不協和音の軋みや粗暴なまでのリズムの脈動。当時の彼の作風が「原始主義」と評される理由だ。

しかし題材こそ原始的でも、作品の書式を支えるロジックは理性的この上ない。



イーゴリ・ストラヴィンスキー

冒頭でファゴットが高音域で奏でるソロが

リトアニア民謡に由来することは研究者が明らかにしているが、曲の全編にわたる同種の素材がふんだんに、しかしまるで原型をとどめない形で活用される。旋律の輪郭もリズムの骨格も、そして背景部分の和声も人工的に歪められながら、互いにねじれの位置をなすがごとく……。

絵画にたとえれば、ここで具象から非具象への世界へストラヴィンスキーは一気に身を投じてみせた。その後の彼は、右に記したような音の構図をさらに突き詰めるながら、キュビズム的ともいえる作風をしばし探求する。しかし1920年代の後半を境としてより風通しのよい、新古典主義的な路線へ傾斜していくのだった。

2 作風の変遷と「改訂癖」

いわゆるカメレオンのような変遷をたどったストラヴィンスキーの作風。それは彼の「改訂癖」にも影響を及ぼしている。

「三大バレエ」の嚆矢をなす《火の鳥》には、1910年に初演されたバレエ版のほかに3つの組曲が存在する。もともとポピュラーな1919年版は、原作の4管編成を2管編成に改め、冒頭から終曲までの要所を抜粋したもの。そこで鳴り響く音は、編成縮小による色彩感の変化という域を超えて、彼がやがて標榜する新古典主義的な書式への歩み寄りを既に感じ

させる。のちの1945年に編まれた、同じ2管編成を維持しながら抜粋部分を増やした組曲版ではその傾向がより鮮明となり、1939年に果たした渡米後の作品群に通じる要素も加わる。

実際のところ1945年版の成立背景には、アメリカ合衆国での版權を新たに確保する意図も介在していたらしい。そして実入りの保障(失礼!)を狙ったストラヴィンスキーは、それと並行して、自らの美学的立ち位置の変化に基づくレタッチまで旧作に施すこととなった。同じ「三大バレエ」でいえば、《ペトルーシカ》の初演に用いられた1911年版と、渡米後に編成を縮小して編まれた1947年版の間に横たわるのも同様の事象だ。

3 バレエとの深い結びつき

1950年代に入ると、それまで意識的に遠ざけていたとおぼしき12音技法も作品に導入していくストラヴィンスキー。この時期を代表する《アゴン》は、名振付師ジョージ・バランシン率いるニューヨーク・シティ・バレエ(NYCB)によって1957年に初演された。バランシンこそは伝説の興行師ディアギレフと並んで、この作曲家とバレエの深い縁を結ぶ立役者だ。

1928年にロシア・バレエ団がパリで《ミューズの神を率いるアポロ》を上演する際に振付を担当したのが、当時24歳の

バランシン。のちに彼が確立する、ストーリー性を排した「身体による音の視覚化」という方法論に至る契機をなしたのが《アポロ》だったと述懐も残している。

その後のバランシンは《カルタ遊び》(1937年初演)をはじめとする諸作品で、ストラヴィンスキーと共同作業にあたり、1948年設立のNYCBでは多くの管弦楽曲のバレエ化にも取り組んだ。ちなみに「抽象的なバレエ」という趣向の楽章構成を合奏協奏曲のスタイルにあてはめて1942年に書かれた《ダンス・コンセルタント》も然るべくバランシンの目にとまり、2年後にモンテカルロで舞台にかけられている。

文/木幡一誠(音楽ライター)

ストラヴィンスキーをめぐる紀尾井ホール公演

紀尾井ホール室内管弦楽団 第126回定期演奏会

垣内悠希(指揮)、玉井菜採(ヴァイオリン)

5/21
金
19:00

5/22
土
14:00

【バレエ特集&ストラヴィンスキー没後50年記念】
モーツァルト 歌劇《イドメネオ》バレエ音楽～シャコンヌとパ・スール
モーツァルト ヴァイオリン協奏曲第4番
ストラヴィンスキー ダンス・コンセルタント
ストラヴィンスキー/シェーファー バレエ組曲《火の鳥》室内オーケストラ版【日本初演】

※公演開催についての最新情報は紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。

第31回 日本製鉄音楽賞 受賞者が決定しました。

将来を期待される優れた演奏家に贈られるフレッシュアーティスト賞は、ショパン国際ピリオド楽器コンクールの栄えある第1回大会にて第2位に入賞し、ますます活躍の場を広げるフォルテピアノ奏者の^{かわぐちなるひと}川口成彦さんに。また、クラシック音楽文化の発展に大きな貢献を果たした方に贈られる特別賞には、長年ステージマネージャーとして演奏会を舞台裏から支え続け、演奏家から絶大な信頼を得てきた^{いがりみつひろ}猪狩光弘さんがそれぞれ受賞されました。川口さんは“古楽器”という枠を超えた、揺るぎない基礎力、豊かな感性と知識力を持ち合わせており、確固たる音楽観での活動を展開している、きわめて楽しみな逸材。猪狩さんはサントリーホール在任中の功績はもちろんのこと、日本の楽壇全体に寄与してきたプロフェッショナルな裏方としての活動が高く評価されました。

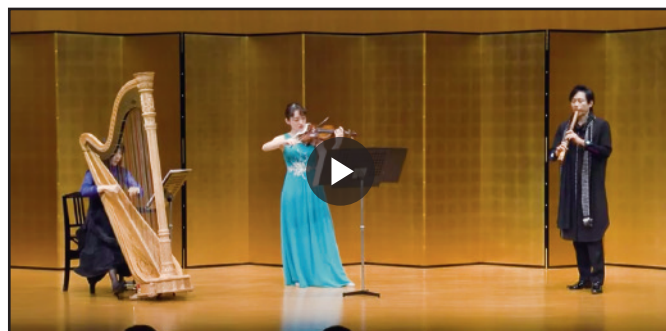


左)猪狩光弘、右)川口成彦 3月22日 贈呈式にて

紀尾井ホールYouTubeチャンネル 公演の様様を好評配信中

紀尾井ホールYouTubeチャンネルでは、過去の公演の様様を一部無料で配信中です。公演を聴きにいらした方も、来られなかった方も、演奏会の雰囲気を高画質でお楽しみいただけます。

紀尾井ホールYouTubeチャンネル → <https://www.youtube.com/user/KioiHall>



編集後記



巻頭インタビューは日本舞踊界の第一線で活躍されるお二人にお話を伺いました。誌面には載せきれなかったのですが、若いころのエピソードや師匠の先生方との軽妙なやり取りなど、笑いの絶えない和やかなインタビューでした。お二人の人柄や雰囲気が少しでも伝われば幸いです。

今号の表紙

『尺八と竹』 [協力] 花/hanadouraku 尺八/田辺嶺山

天に向かってぐんぐんと真つすぐに伸びる竹。日本では縄文時代の遺跡からも竹素材の製品が出土されていて、古来より身近な存在だったことがうかがえます。真竹で作られる尺八は奈良時代に唐から伝わったとされ、以来今日まで1300年近く愛される楽器です。食材・建材・日用品・生薬そして楽器と、日本人の生活に深く根差している植物です。

紀尾井ホールにご支援いただいている企業および個人の方々です

紀尾井サポートシステム会員 (五十音順・「株式会社」等表記及び敬称略)

- 《特別協賛会員》 A.ラング&ゾーネ/日鉄ソリューションズ/三菱商事/三菱地所
 《みやび会員》 伊藤忠商事/大島造船所/KDDI/菅原/住友商事/丸紅/三井住友銀行/三井物産/三井不動産/三菱商事/三菱地所/メタルワン ほかに匿名2社
 《ひびき会員》 オカムラ/きらぼし銀行/高砂熱学工業/竹中工務店/山下設計
 《みどり会員》 青鬼運送/赤坂維新號/赤坂 エクセルホテル東急/今治造船/ヴォートル/エーケーディ/NTTDコム/荏原冷熱システム/鹿島建設/ザ・キャピトルホテル 東急/三協/清水建設/上智大学/西武プロパティーズ/大成建設/千代田商事/テイスト・ライフ/東芝ライテック/永田音響設計/ニュー・オータニ/ハウス食品グループ本社/パナソニック/富士ゼロックス/松尾楽器商会/三井住友信託銀行/三菱UFJ銀行/三菱UFJ信託銀行/三菱UFJモルガン・スタンレー証券/ミュージション/明治座舞台/ヤマハサウンドシステム/有帆
 《おおい会員》 青木陽介/飯沼万里子/石崎智代/磯部治生/井上善雄/植竹浩樹/大武和夫/小島 徹/片山能輔/久保祐子/倉吉遼介/栗山信子/佐久間庸行/佐部いく子/志立正嗣/清水 正/清水多美子/清水康子/鈴木 亮/高下謙吾/田中 進/外山雄三/鳥居荘太/中塚一雄/中西達郎/西村剋美/原田清明/北條哲也/堀川将史/牧本恵美子/松枝 力/松原 良/松本美恵/養輪永世/宮本信幸/陸田 実/村上喜代次/持留宗一郎/八木一夫/八木晶子/山内寿美/横地卓哉/吉峯裕毅
 ほかに匿名22名 計205口 (2021年4月1日現在)

特別支援会員 (五十音順・「株式会社」等表記略)

- アステック入江/五十鈴/NST日本鉄板/NSユナイテッド海運/NSユナイテッド内航海運/エヌエスリース/エヌテック/王子製鉄/大阪製鐵/丸製工業/草野産業/黒崎播磨/合同製鐵/小松シャリング/山九/産業振興/三見金属工業/サンユウ/三洋海運/ジオスター/新日本電工/スガテック/大同特殊鋼/大和製罐/高砂鐵工/高田工業所/鶴見鋼管/DNPエリオ/テツゲン/東海鋼材工業/東邦シートフレーム/トピー工業/日亜鋼業/日鉄環境/日鉄ケミカル&マテリアル/日鉄建材/日鉄鋼管/日鉄鋳業/日鉄鋼板/日鉄興和不動産/日鉄ソリューションズ/日鉄テックスエンジ/日鉄ドラム/(旧)日新製鋼/日鉄物産/日鉄物流/日鉄物流君津/日鉄物流八幡/日鉄保険サービス/日鉄ボルテン/日鉄溶接工業/日本金属/日本触媒/濱田重工/富士鉄鋼センター/不動テトラ/幕張テクノガーデン/松菱金属工業/三島光産/宮崎精鋼/吉川工業
 日本製鉄 (2020年度、匿名一社除く)



〔新宿区立納戸町公園〕ハインリヒと光子が住んだ家の跡地は現在公園になっている

紀尾井町音楽散歩 【第1回】

奥国と日本との架け橋となった夫妻 ハインリヒと光子

紀尾井ホールの建つ場所は、江戸時代、尾張藩徳川家の中屋敷でした。明治時代になると、新政府がこの地を買い上げて1899年にオーストリア＝ハンガリー帝国公使館として生まれ変わります。設計は赤坂離宮(現・迎賓館)を建てた片山東熊の



紀尾井町に建てられたオーストリア＝ハンガリー帝国公使館(撮影・1912年)
国立国会図書館デジタルコレクションより

恩師でもあるJ.コンドル(1852-1920)によるもので、煉瓦造の立派な巨館でしたが、建物は関東大震災で倒壊、その後この公館は麻布に転居し、現在に至ります。

ところで、紀尾井町に公使館が建つ6年前、オーストリア＝ハンガリー帝国の代理公使として着任したハインリヒ・クーデンホーフ＝カレルギー伯爵(1859-1906)は、日本人の青山みつ(クーデンホーフ光子/1874-1941)と国際結婚します。伯爵夫妻は、紀尾井町から15分ほど歩いたところにある尾張藩上屋敷(現在の防衛省)の裏に建っていた、旧・尾張藩医子息の柴田承桂博士(しばたしやうけい)の家を借り、ここで2人の男児を育てます。任期を終え1896年に伯爵は一家とともに本国に帰国するのですが、中でも次男のリヒルト(1894-1972)の活躍は目覚ましく、彼は長じて、現在のEUの起源となる“ヨーロッパ統合”の理念を提唱し、その活動に生涯を捧げます。さらにリヒルトは統合の象徴たるヨーロッパ連合の“国歌”に、ベートーヴェンの交響曲第9番の第4楽章を提案、1985年にやっと、当時のEC(ヨーロッパ共同体)で採択され、現

在の欧州連合や欧州議会においても「欧州の歌」として正式に歌われています。

一方、明治新政府は、このオーストリア＝ハンガリー帝国に大日本帝国の在外公館を設置し、1887年、旧・美濃大垣藩主で、外交官となっていた戸田氏共伯爵(1854-1936)を全権公使として、首都ウィーンに派遣します。氏共とともに渡欧した妻の戸田極子(1858-1936/実父は岩倉具視)は、「鹿鳴館の華」と呼ばれた社交界きっての美貌の持ち主で、ウィーンの社交界でもその名声は知ら渡ります。彼女は幼少期から山田流箏曲を習い、ウィーンでも、その腕前を披露したとのこと。当時のウィーンですでに大作曲家となっていたブラームス(1833-1897)がこの極子の演奏を耳にしていたというエピソードがあります。この逸話にはさらなる研究が待たれますが、ブラームスの遺品に日本の民謡集(ピアノ編曲版)の楽譜が発見され、彼の作曲スケッチも書き込まれていることから、この大作曲家が日本の音楽に興味を示していたことは間違いありません。



ハインリヒと光子



〈K〉

公式SNSで最新情報配信中



紀尾井
ホール

紀尾井ホール
室内管弦楽団



チケットのお申込み

紀尾井ホールウェブチケット <https://kioihall.jp/tickets>

※紀尾井ホールチケットセンターの電話受付は3月31日をもって終了いたしました。

紀尾井ホール

公益財団法人 日本製鉄文化財団

〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町6番5号 TEL.03-5276-4500(代表) FAX.03-5276-4527 <https://kioihall.jp>

